

令和3年度 学校評価

学校教育目標 他者と協働し 次代を生き抜き 未来を創る生徒の育成

◇年度末評価◇

コロナ禍により、様々な教育活動に制限がかかり、他者と協働する力を身に着けさせる場面づくりには、非情に苦労をした。とくに授業時間内は難しかったため、様々な取組や行事において、そのような機会が設けられるように工夫をした。生徒たちは、G I G A 端末をはじめとするI C T 機器を大きな違和感なく使いこなし、従来通りではない形の取組や行事においても、成果や結果を出すことができていた。

また教育活動を進める中で、感染に対する考え方には全く真逆の場合もあり、だれもが納得し折り合うことは、一つ一つの取組み等で、難しい中、それでも次々と改善策が提案され、生徒にとっても教職員にとっても、これから何があるかわからない未来を生きる力が育まれたのではないかと思う。コロナ禍だからこそ身につき伸びた力として、ポジティブに捉えたい。

ほぼコロナ禍で3年間を過ごした卒業生については、3年生を送る会での創意・工夫された映像での学年合唱の発表、卒業式での卒業生代表の言葉から、私たちはコロナに負けなかった、という自信と誇りが垣間見え、学校教育目標にある次代を生き抜く力を、十分ではないにしても身に着けさせることができたと判断できた。

保護者・生徒アンケートでも、前年同期比で下降した設問もあるが、あいさつ・他者の理解など人間関係に関わる設問については上昇しており、学校教育目標や目指す生徒像などについて、ある程度達成できたと思われる。

1. 「確かな学力」の育成に向けた『学力向上プラン』

重点目標 次代を生き抜き未来を創る学力を身に着けさせる

◇年度末評価◇

学習確認プログラムの結果は、前年度比では1年生がアップ傾向、2・3年生は若干のダウン傾向となった。ただし、2・3年生とも小学校ラストのB a s i c 2との比較ではアップしており、決して満足してはいけないが、小学校時で身に着けた学力を中学校で更に伸ばす、ということはできたのではないかと思う。

ただし、保護者・生徒からの学校評価アンケートでは、昨年度比のポイント比較で、やや厳しい結果だったと言わざるを得ない。他校との比較はできないが、コロナ禍により、今求められる「対話的で主体的で深い学びのある授業」を行えなかつたことが評価されたのだと思われる。次年度はコロナ禍3年目でもあり、もうコロナのせいにはできないと、覚悟すべきと言える。

◇取組の改善◇

校内の年間総括で、「思った授業ややりたい授業が制限されてできなかつた」「研修等で学んだ新たな授業を実践できるような状況ではなかつた」と残念な思いを訴える教員も多く、その気持ちは次年度に活かされるように導きたい。しかし、社会全体がそのような状況となることが大事と思う。

また年度最後の打ち合せで、「学校評価アンケートの結果をコロナ禍のせいにしないように」とお願いし、来年度どのような状況でも学力の向上と、学校評価の向上を目指しましょうと訴えた。教職員からは、皆同じ思いであると強く感じられた。

2. 「豊かな心」の育成に向けて

重点目標 次代を生き抜き未来を創るために他者と協働できる心を育てる

◇年度末評価◇

生徒・保護者アンケートとともに、「学校が楽しいか」についての評価は下がっている。これはコロナ禍により、会話を減らし、行事を減らし、部活中止期間もあった中では、やむを得ないと思う。昨年度も同様にコロナ禍であったが、自粛期間が長期にわたっている上、さらに本校生徒はよく指示やお願いを守って学校生活を行ってくれたからこそこの結果とも言えるのではないか。

その中でも、「あいさつ」「他人を思いやる」内容の設問への回答結果は向上している。本校では、いわゆるコロナ差別というものがなく、陽性者・濃厚接触者になった仲間を温かく迎え入れる雰囲気もあり、生徒だけでなく、日々の教職員の細かな指導や配慮等にも感謝したい。

◇取組の改善◇

引き続き、コロナ差別を生まないよう人権教育の面からも指導を進め、高い人権感覚を育成し、誰もが安心して通える学校づくりを進めたい。

また学校が楽しいところであるように、感染予防対策は徹底し、委員会等の通知を守ったうえで、生徒たちが集まる場面や、協働する場面、校外学習を含めた学年や学校全体の行事を少しずつコロナ禍以前に戻していきたい。

3. 「健やかな体」の育成に向けて

重点目標 次代を生き抜き未来を創るため必要な健やかな体を育成する

◇年度末評価◇

部活動については、最も保護者・生徒アンケートで最も評価が低い。長い休止期間があり、子どもの健康や体力にも大きな影響を与えたと思われる。活動内容や期間を厳しく制限し、それを順守した京都市内の中学校全体を見ても、その影響が推し量られる。

その中でも、子どもたちはできる限りの活動を積極的に行い、充実したものにしてくれた結果が、評価は低いながらも、昨年の結果よりポイントが上昇したことがわかる。保護者は、活動の様子（中身を知る術がなく、長い休止期間に対しての残念な評価であったと思われる）

その他コロナ禍で十分満足できないものもあったが、年度当初に計画した具体的な取組はすべて実施でき、その時々の生徒の姿や事後の感想から、概ね満足できる結果と評価している。

◇取組の改善◇

感染対策がどの程度必要かに左右されるが、体育授業・部活動について、保護者へ公開する機会を増やし、積極的に応援していただき、活性化させることで、それを励みとして子どもたちが頑張り、より健やかな体の育成につながるように努めたい。

また体育委員会が以前より念願としている球技大会を、次年度こそ実現させ、その本番に向かって取組なども通じて、スポーツの楽しさや素晴らしさを味わわせることも、体力の向上につなげたい。

4. 学校独自の取組

重点目標 7校(6小1中)のよさを生かした、9年間の連続性を考慮した学びと育ちの充実を図る。

◇年度末評価◇

正直、目標達成には至っていない。生徒・児童の交流は、リアルな場面は作れていらず、オンライン活用、または映像を制作しDVD等で送ることしかできていない。直接の反応が実感できず、後日紙による感想集等では、子どもたちの満足感は低かった。

教職員間では、できる限りのことは行ったが、全員参加の小中合同夏季研修会が、一部のメン

バーによる分散会のみとなってしまった。後日の伝達研修など、工夫はしたが、顔を突き合わせることで互いを知り、理解しあえる部分もあり、それがその後の連携のしやすさにもつながるはずであり、とても残念だった。

学習面や生徒指導面の連携については、おおよそできており、小学校で身につけられた学力を、さらに伸ばすことはできたと判断できる。

◇取組の改善◇

コロナ禍が収束するだけで簡単に改善できることが多くある。まずは収束を願い、コロナ禍前の教職員間・生徒と児童の間の連携場面の準備を行いたい。アイデアとしては、様々あるため、今のところ、働き方等を理由にしたコロナ禍を機とした内容の削減等は考えていない。まずは元に戻すつもりである。

5. 教職員の働き方改革について

重点目標 教育の質を落とさずに時間外勤務削減と業務の見直し等を進め、働き方改革を実現する

◇年度末評価◇

月平均80時間以上の超勤者がおられる。この理由のひとつには確かに部活動がある。その証拠に、3学期のコロナによる部活休止期間の方が帰宅平均時間は早い。

ただし部活の有無だけが理由ではなく、個人では仕事の優先順位をつけることと、思い切った取捨選択を行うことが必要。学校全体では、教育の質を落とさず、行事や取組の精選を、さらに進めることが必要である。

◇取組の改善◇

我々一人一人の働き方の現実が、教員志望者への影響が考えられることなど、「自分が」「自分は」と自身のことだけを考えず、職場全体（学校だけでなく教育界全体）を考えた上で、個々の働き方改革を進めるよう促したい。

学校全体としては、コロナ禍も3年になり、少しずつコロナ禍前に行事や取組を戻していくが、全く同じ所までは戻さず、一つ一つの教育的な意義や効果を確認しながら、必要性を考慮していく。

6. いじめの防止等についての取組に向けて

重点目標 いじめをしない・させない・許さない・見逃さない

～お互いの人権を大切にした人間関係作りを目指す～

◇年度末評価◇

今年度、いじめの重大事案はなく、コロナ禍の不安でストレスがたまる中、いわゆる「コロナ差別」という事象も全くななく、いじめ防止については十分できていると言える。

ただし、全く生徒間のトラブルがなかったわけではなく、広義のいじめはあり、それぞれについては学年団を中心に指導・解決にあたり、積残しはない。3ヶ月程度開けたうえでのいじめの有無の確認においても、長く状況が続くような事象はなかった。

◇取組の改善◇

引き続き人権教育に力を入れ、年2回の人権教育期間だけでなく、年間を通して「人権」については大切に考えさせたい。式など全生徒に訴える機会には、必ず「人権」を念頭に入れた内容を盛り込み、教職員全体の意思としていじめは許さない、気持ちを生徒たちには訴えたい。